0:30pm

契約に関する回答書ができたところで、美咲は会社の電子決済システムに乗せる。最後に、在宅勤務終了の手続きをする。

※在宅勤務の時間管理。

そして、軽く昼食をとり、家を出る。

この時間帯は、日に二度目の通勤時間帯に当たる。地下鉄は空いているとはいえなかったが、今日は運良く座ることができた。

ふと目の前に立っている細身の女性の指が目にとまった。左の人差し指にリングをしている。

― あ、妊娠してるんだ ―

結婚すると左の薬指にマリッジ・リングをするように、妊娠が分かると夫から贈られた「マタニティ・リング」を左の人差し指につける習慣がある。

※働く女性が一般的になる中で、通勤などが大変にもかかわらず、周囲からは判断されにくい妊娠初期の女性にも優しい社会が確立。

「どうぞ。」

美咲は笑顔で声をかけると席を譲る。

「こんにちわあ。」

美咲が会社に着いてメールを開くと、「みけねこジョーイ」シリーズの翻訳を委託している今井から、シリーズ4作目「みけねこジョーイといじわるキツネ」の日本語原稿の初稿があがってきていた。

早速美咲は校正を進める。絵本は分量も少なく、文章自体難しくない。その分ごまかしがきかないともいえる。また、単純に日本語に訳すのは、何の苦労もないし、翻訳ソフトも進歩しているが、英語にはない日本語独特の微妙なニュアンスをいかに出していくかが腕のみせどころである。

話の中盤で「いじわるキツネ」のしゃべり方をどうするか、美咲は迷った。児童向けの絵本だから、あまりキツい言葉は避けたいけれど、キツネが何となく憎らしく思えるようなしゃべり方でないと話がつまらなくなる。美咲は一つ一つの言葉を吟味しながら校正を進めた。

美咲の会社はそう規模も大きくないので、日本語訳自体は外注に出しているが、1冊の本を出版するために、通常3人程度のチームを作って作業をしている。今回の仕事は、美咲は渉外業務を含め全体のコーディネートを担当しながら、美咲とイギリス人のハートが文章の校正、梨田がイラストを担当している。海外の絵本のイラストは、そのまま使えるものもあるが、日本人好みに多少手を加えなければならないこともある。

※日本企業と外資系企業とにかかわらず知的労働分野における外国人が珍しくない存在に。

「ハートさん、梨田さん、モニター見てくれる？」

美咲は原稿を共用モニターに映し出すと、チームを組んでいる2人に声をかけ、打ち合わせを始めた。

ひととおり読み終わると、ハートは、

「キツネのしゃべり方難しいですね。"YOU" 一つとっても、日本語にはいろいろな表現があるし。」

とコメントし、梨田もうなずく。

「そうなのよ、下品にならないように、いじわるさを出すのって、難しいのよね。」

「根がいじわるな人だと、簡単なんでしょうけどねえ。」

ハートが腕を組む。

「総務の滝口さんに聞いてみようか。あの人さわやかにチクリと言うの得意でしょ。」

梨田がちゃかす。

「それは妙案ね。」

笑い声が響く。だいたい、いつも和やかに打ち合わせは進む。

3:00pm

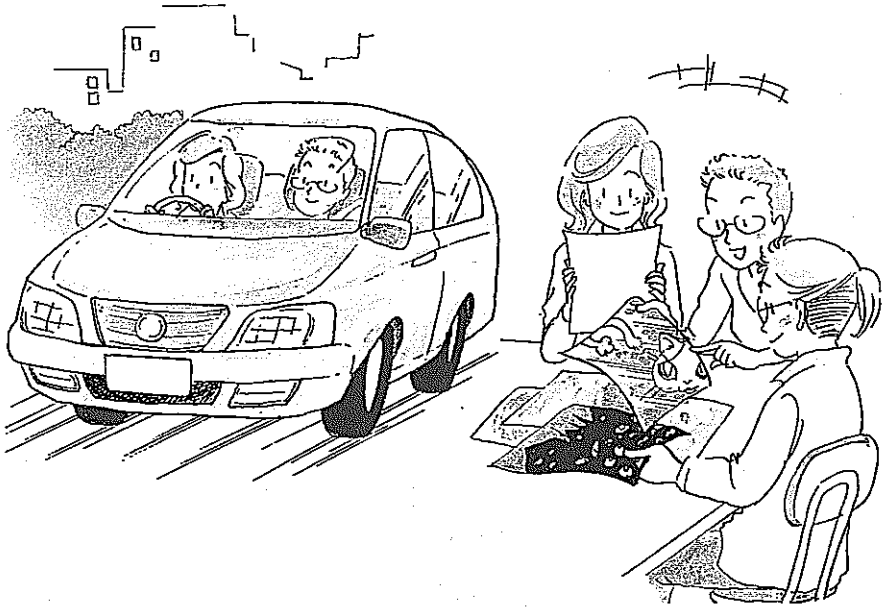
文章がある程度固まったので、美咲と梨田は、イラストレーターのところに打ち合わせに出る。
「これだけ世の中進んでも、結局は直接目で見るしかないんですよねえ。」
「しょうがないよね。画面に写るのと、紙に印刷されるのとは、微妙に色合いとか違ってくるもんね。そこの微妙なところで梨田さんのセンスが生きてくるんじゃないの。」
美咲は、軽量電気自動車を走らせる。

※環境問題に配慮した軽量電気自動車の普及。

社員の働き方はさまざま。
大自然をテーマにした児童書を専ら担当している社員は、自然が豊かな山村に居を構え、打ち合わせもテレビ会議で済ませていたりする。
社内には、名前を知っているだけ、またはテレビ画像で見たことがあるだけ、という社員もいる。
しかし、最後の仕上げは、どうしても直接目で確認することが必要になる。美咲の会社では、これを「ナマチェック」と呼んでいる。
先の地方で山ごもりしている社員などは、「下山」、「世俗に出向く」などといってナマチェックのため出社する。

※IT化の進展で在宅勤務の選択が広がる。

イラストはほぼできあがっていたが、全般にもう少し柔らかいトーンにしたい、という梨田の意向で、微調整を続けた。
再度、来週、仕上がりを見ることにして、２人は会社に戻る。



3:00pm

健太は、退社後、カラフルなヨットの浮かんだ水路を一望する眺めのいいレストランで、遅めの昼食をゆっくりとってから、家路につく。健太は、スーツ姿のまま、駅近くのスーパーに入った。夫婦のうち、短時間勤務の方が、夕食当番である。
携帯電話からアクセスし、インターネットで冷蔵庫の中を確認する。
さて、今晩は何にしようか・・・。
米やしょうゆといったストックがきくものや、牛乳などいつも欠かせないものは、インターネットで農家や商店と直接契約して購入している。
しかし、野菜や肉ばかりは、いつ何を使うか、その時々に考えるので、スーパーに足を運ぶことになる。直接目で見て選びたい、ということもあるが。
料理は、たまにはめんどうと思うこともあるが、２人の子どももおいしいと言って食べるので、悪い気はしない。

※男女が家事を平等に分担。

※IT家電の普及。

※IT化により生産者等からの直接購入が増加。

買い物を済ませると、健太は保育園に登夢を迎えに行く。この時間子どもを迎えに来る親は、健太のほかにもいるのだが、今日は迎えに来た他の親とははちあわせなかった。一方で、この時間に子どもを預けにくる親もいる。
「どうも、高島です。」
健太の声を聞きつけて、登夢が駆けてきた。
「登夢、今日もちゃんとセンセイの言うこときいていい子にしてたかあ。」
登夢は、ぷんと大きくうなずいた。
「でも、ちょっとおもらししちゃったんだよねえ。」
今度は小さくもう１回。
「どうもお世話さまでした。」
健太は左手に買い物袋、右手で登夢の手をひいて保育園を後にした。

※多様な働き方が普及するのに伴って、保育園の預かり時間も弾力化。

登夢は、道すがら、んーとね、と何度も前置きを付けて、今日の出来事を話した。健太は大げさに驚いたり、感心したりしてみせながら登夢の話を聞く。そうしていると、家にはあっという間に着いてしまう。

5:00pm

「ああ、のど乾いちゃったよー。」
　健太の背後で来夢が冷蔵庫を開ける。
「おい、帰ってきたら、ただいまだろう。あいさつはちゃんとしないとだめだぞ。」
　オレンジジュースを注いだコップに口をつけたまま、
「ままいま。」
　バツが悪そうに、来夢はおそらく「ただいま」と言った。

　放課後、来夢は、週に3日はクラブ活動をして帰ってくる。足が早い来夢は、女子サッカー部に所属している。女子サッカーのプロリーグに憧れの選手がいたのが、サッカーを始めるきっかけだった。来夢は将来プロサッカー選手になることが夢である。

※小学生の遊び場と安全の確保のため学校の施設内で地域による子育て支援活動が活発。

　それ以外の日は、時間にゆとりがあるお年寄りや、中高生のボランティアが放課後の遊び相手をしてくれる。ボランティアといっても彼らは市からいくばくかの謝礼をもらっている。
　お年寄りが教えてくれる遊びは、最近の子どもにとっては、むしろ新鮮に映るらしく、好評だ。学生ボランティアは、お兄さん、お姉さんといった感じで、子どもに近い立場で遊んでくれるので、これはこれで好評。
　高島家の場合には、学校が終わるころには、健太が家にいるので、クラブ活動がない日は、来夢が帰ってきてもいいのだが、来夢は友達と一緒にいることを選んでいる。
　今日は、遊びの日だ。

※地域活動が、お年寄りの生きがいであるとともに、多少の収入源にも。
※中高生もボランティアの意識を高めるために、授業や課外活動でボランティア活動に取り組む。また、小さい子どもと遊ぶ貴重な体験の場に。

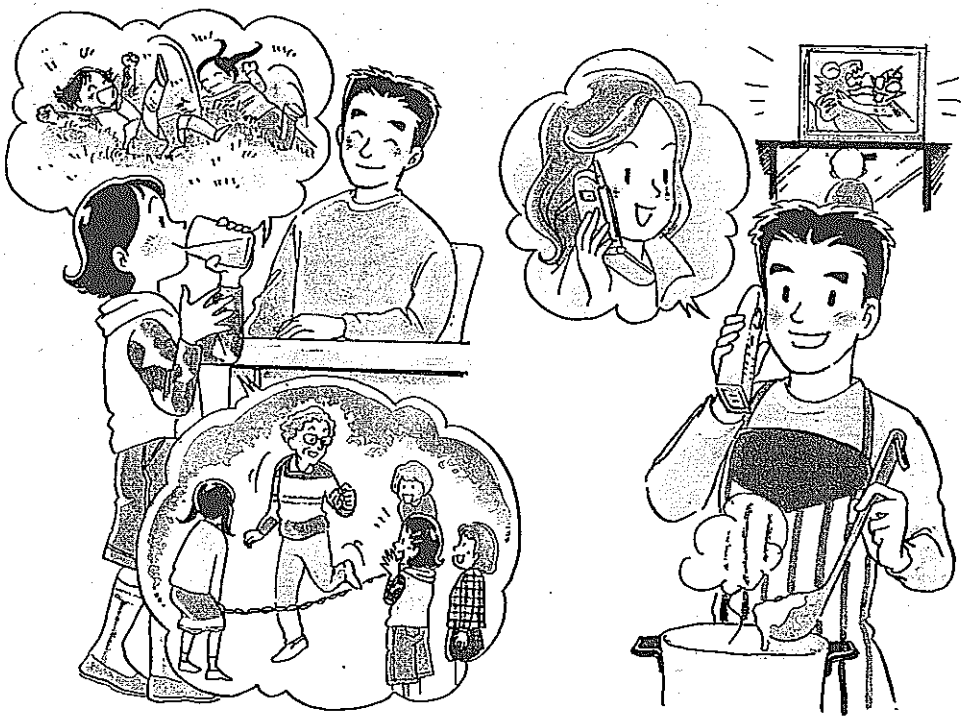
「今日は何して遊んできたんだ？」
「おばあちゃんが、ゴム飛び、っていうののやり方を教えてくれたよ。簡単だけど、やってみるともりあがっちゃった。それからね、玲奈ちゃんと校庭の芝生で寝ころんで、雲を見てた。」

※校庭の芝生化は、子どもの安全とともに、子どもが外で遊ぶようになり、心身の健康によいことから推進。

　来夢は健太の脇から鍋をのぞき込んで、カレー、とつぶやくと自分の部屋に行った。夕食までに宿題を済ませないと、夜、テレビを見させてもらえない。

　登夢はテレビに夢中になっているようだ。この時間帯のアニメは子どもの間ではやっているらしく、登夢も毎日欠かさない。
　健太はキッチンからリビングをのぞき、登夢の様子をうかがう。テレビに夢中で振り向きもしない。
「登夢、今日カレーだぞ。」
　登夢は、ん、と短く返事をしただけだった。

　電話が鳴った。美咲からだった。
「今から帰るね。」
　午後6時。



9:00pm

家族4人の夕食を終えると、健太は登夢を風呂に入れ、一緒にブロックで遊んだ後、寝かしつける。寝付きが悪いときは、美咲が絵本を読んで聞かせる。今日は、すんなり寝てくれた。

健太と美咲は、リビングでコーヒーを飲んでいる。
「次の本って、いつ頃出るの。登夢も楽しみにしてるんじゃないか。」
「そうね、まだ担当チームの中でも、もんでいる最中だし、あと2か月くらいかかるかなあ。あなたの方はどうなの。営業って顔合わせる頻度も大切なんでしょ。」
「ああ、なんとかつないでるよ。短時間勤務もあと2か月だからもう大丈夫だろう。」
「2人でフルタイムだと家計は楽だけど、子どもたちとの時間が減ってしまうね。」
「うん。ただ、来年来夢が中学、スポーツの盛んな私立に行きたいって言うと、少しお金かかるよなあ。それと、登夢が大きくなったら、この家じゃ手狭だっていう問題もあるし。」
「そうね。でも、もう少し子どもと一緒にいてあげたいな。あなたがフルタイムに戻ったら、私、在宅勤務を増やそうかな。」
「おれだってフルタイムになってもできるだけ子どもと接したいと思ってる。一緒にがんばろうな。」

※学校の情報公開が進み、学校の個性を見極めた上で選べる社会に。

※家族のライフスタイルや価値観に合わせた働き方が可能。

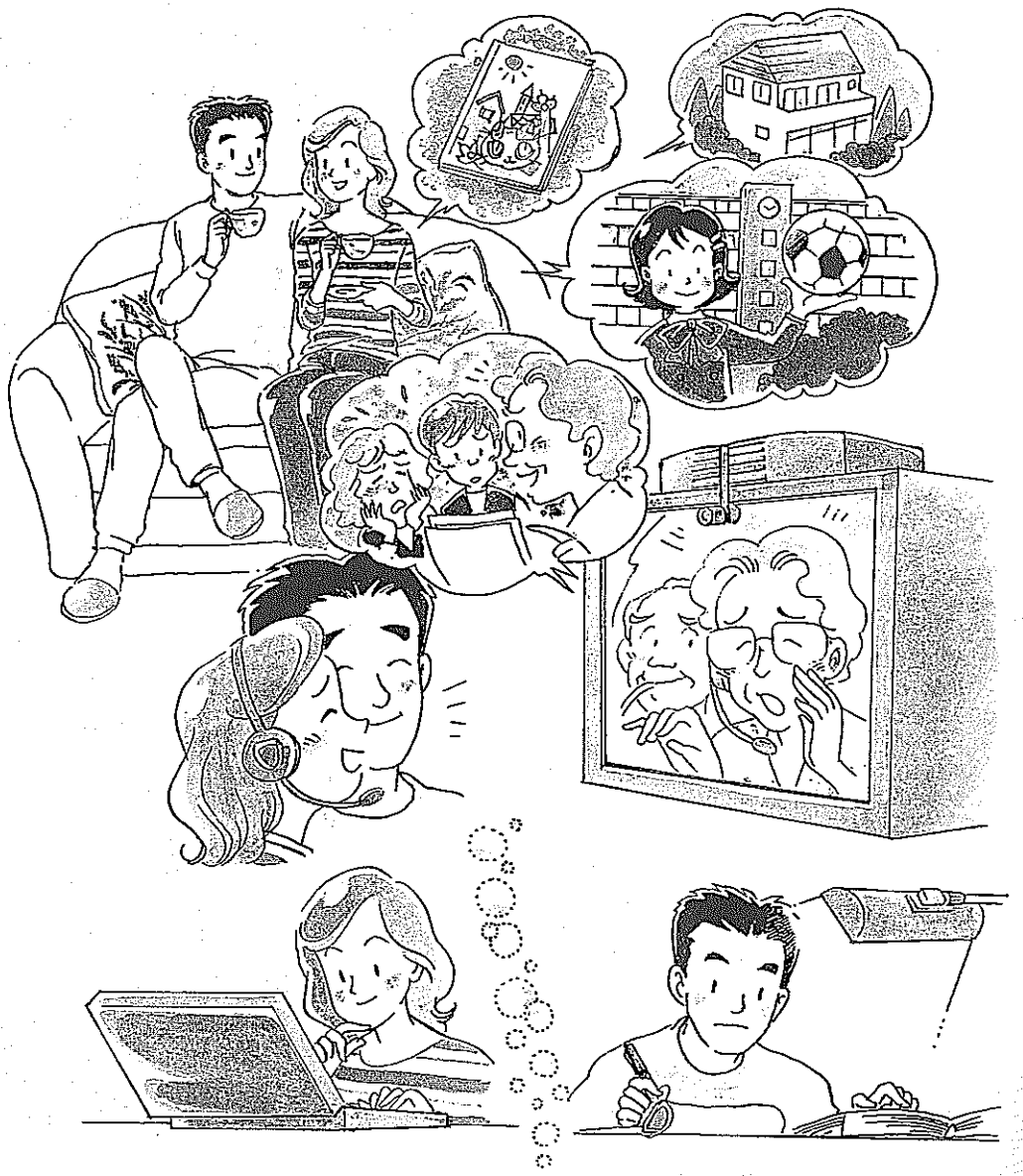
テレビ電話が鳴った。美咲の実家の両親が2人並んで写っている。お互い顔を見ながら最近の出来事を話す。美咲の両親は業界こそ違うが会社の上役でそれぞれ苦労しているようだ。
先日驚かされた登夢の急な発熱のことを話すと、美咲も小さい頃たびたび同じようなことがあり、ハチミツ入りのホットミルクを飲んで寝ると良くなったそうだ。

※祖父母も共働きということが一般的に。

電話を切ると、美咲は、さて、とつぶやき、
「来夢に負けないように、私も勉強。」
と言いながらパソコンで海外の児童書の売上げをリサーチする。最近、たいして大きくない出版社が発行した本が、本国で映画化され、その本も爆発的な売上げを記録したことがあった。青田刈りで版権を手に入れることはリスクもあるが、当てたときのメリットは大きい。年俸にも大きく跳ね返ってくる。

※能力や実績に応じた報酬体系が普及し、プライベートな時間に自己研鑽する場合も。

一方の健太も書斎に入り、薬剤師の勉強を始める。薬剤師の資格は必須ではないが、商品知識と医者とのやりとりでの耳学問では限界がある。説得力のあるセールスには専門的な知識が必要だと常々感じていた健太は、短時間労働を単なる子育て期間ではなく、ちょうどいいステップアップの期間とも捉えている。
健太は小さい頃「お医者さんになりたい」と言っていた。今から医学部に入り直すことはとてもできないが、薬剤師になることができたら、人と薬に関わる会社を興して、人の健康に役に立つ仕事をしたいと思っている。

※2001年小学生がなりたい職業の男子第3位（第一生命調べ）。
※働き方として起業を目指すケースも増加。

そして、いつものように高島家の一日は終わる。